

旧・横浜市庁舎の建築概要

2020.12.5 吉田鋼市

1. 旧・庁舎の概要

- ・1956（昭和31）年12月起工、1959（昭和34）年9月竣工。その後、1966（昭和41）年に市会3号棟、1978（昭和53）年に市会2号棟、2009（平成21）年に中庭棟を増築。1988年に「市民広間」の模様替え（設計は竹山実建築総合研究所）。2007（平成19）年から2009（平成21）年にかけて免振レトロフィットによる耐震工事を実施。
- ・鉄骨鉄筋コンクリート造8階建て、地下1階。建築面積1,344.87坪（現在は5843.69㎡）、延床面積8,570.12坪（現在は30,032.23㎡）、敷地面積18,852㎡
- ・設計は村野・森建築事務所、施工は戸田組（現・戸田建設）
- ・建設費98,650万円、付帯設備36,260万円

2. 設計者・施工者決定の経緯

- ・1956（昭和31）年8月から10月まで、5者（創和建築設計、村野・森建築事務所、山下寿郎設計、前川国男建築設計、松田・平田設計）による指名コンペが行われた。審査委員は中村順平（元・横浜高等工業教授）、今井兼次（早稲田大学教授）、佐藤鑑（横浜国立大学教授）、田中省吾市助役、津村峰男市議会議員。市の「意図する主題」は「市庁舎として市の業務を能率的に運営ができ、堅実であると共に国際港都横浜市の象徴として品位あり、市民に親しまれ永く誇るに足る意義ある市庁舎を建設するための基本設計案であること」。
- ・施工は大林・清水・竹中・大成・鹿島・戸田の6社による指名競争入札

3. 7代目市庁舎

- ・横浜市庁舎としては7代目で、開港100年記念として建てられ、歴代の市庁舎のなかで最も長く使われた。市制施行後130年間の横浜の歴史の半ばは、現市庁舎とともにあった。他の各代の市庁舎は2代目を除いて、いずれも仮庁舎的な存在で、10年前後しか用いられていない。現市庁舎に次いで長く19年間使われたのが4代目で、現市庁舎と同じ敷地内にあった木造2階建て。これは戦災で焼失。建築的に注目されるのは現市庁舎と2代目で、2代目も同じ敷地内にあり、開港50周年記念として1911（明治44）年に建てられた煉瓦造3階建て（設計は池田稔、施工は原木仙之助）。これも、わずかに12年の寿命で関東大震災により倒壊したが、その基礎遺構が現位置で保存展示されている[旧・市庁舎竣工時の主資料「横浜市庁舎落成記念」（横浜市、1959年9月）、「建築画報」vol.3, no.10（光元社、1959年12月）、「新建築」（1960年11月号）、「国際建築」（1960年12月号）]。
- ・敷地は2代目、4代目、7代目の市庁舎が建てられた場所であり、明治末以降、常に市政の中核として機能してきた。この敷地はさらに古くは「港町魚市場」が置かれた場所であり、横浜の食品流通の要の地でもあった。
- ・旧・市庁舎竣工当時の市の人口は136万人で、市長は平沼亮三。市職員数は当時が約7600人で、現在は約27000人。市会議員数は当時が65人で、現在は86人。

4. 建築的特徴

- ・プランは高層行政棟と低層議会棟を 2 階分吹抜けの「市民広間」でつないだ矩形の釣り針型。高層行政棟と低層議会棟をバランスよく組み合わせる地方自体の庁舎は、旭川市庁舎（1958 年、設計佐藤武夫、施工は戸田組）など当時盛んに用いられており、その一典型。中央に立派な車寄せを設けた左右対称の戦前型のモニュメンタルな玄関がなく、「横濱市廳」という梁に張ってある表札も非常に小さくて目立たない。「市民広間」はストックホルム市庁舎の「青のホール」を参照したとされる。
- ・柱・梁はコンクリート打ち放し、壁面は特製厚型タイル張り。壁面は、滑り出しの窓のある部分と無窓の壁面、それにバルコニーを設けて壁面を後退させた部分があり、単調ではない凹凸のあるやや複雑なファサードを構成。柱も、上にいくにつれて 2 階ごとに細くされており、上層が軽快となるよう細かな配慮が見られる。
- ・「市民広間」の泰山タイルによる壁面レリーフは、辻晋堂（京都市立芸術大学教授）の作品。市議会議場の天井の石膏レリーフは、須田晃山（宮城県出身で東京美術学校彫刻科卒）の作品。
- ・敷地が埋立て地なので、基礎工事に時間を要す。33 本の井筒を打つ（外径 5m のもの 11 本、4m のもの 14 本、3.5m のもの 8 本、最長 46.78m で平均 37.98m）
- ・屋上の円錐形籠状鉄塔は高さ 13m、丸鋼どうしの溶接でできている。この籠状鉄塔が前掲の諸資料の表紙を飾る。
- ・経済状況の回復を背景に、それまで水道・道路などのインフラや学校などの教育施設にしか使えなかった地方債が県・市庁舎などの行政施設にも使えるようになった 1953（昭和 28）年の法令改正に伴って、この時期相次いで建てられた地方行政庁舎の代表的なものの一つ。

5. 村野藤吾の作品内での位置

- ・自治体庁舎としては尼崎市の大庄村役場（1938 年、現・尼崎市立大庄公民館）に続くものだが、大都市の自治体庁舎としては初めての仕事。少し後に建てられた尼崎市庁舎（1962 年）と共に、村野の市庁舎建築を代表するもの。しばしば濃密な細部をもつことで知られる村野の作品としては、比較的シンプルで本来のモダニズム建築に近く（高層行政棟は少しミース風）、ほぼ同時期の八幡市立図書館（1955 年、現・北九州市立八幡図書館）、関西大学簡文館（1955 年）と同様な造形的表現を示し、やや後の早稲田大学文学部 33 号館（1962 年、2011 年取壊し、2014 年 KAJIMA DESIGN の設計で新 33 号館竣工）へとつながる作品系譜に属する。